博士論文審査の要旨

该论文所讨论的“复用”结构是现代汉语口语中比较常见同时也比较独特的一类语法现象，汉语学界虽然对此类现象已有关注，对其中的某些结构已有述及，但还缺少全面、系统的研究，对其作为一类语法现象的表意功能及其生成理据等，缺少非常具体、深入的阐释。该文在先行研究的基础上，突破词类界限，即对跨词类的成分“复用”现象做出描写和解释，应当说是选题是很有意义的，研究角度和方法也是比较可取的。

除“前言”和“结语”部分，该论文的正文共分四章，分别讨论了现代汉语口语中使用频率较高的四类复用结构:(1)副词复用结构；(2)人称代词复用结构；(3)“我/你+说/想/看+我/你”结构；(4)“X什么X”结构。

第一章《副词复用结构初探——主要以副词“都”、“还”为例》，对副词复用结构的生成条件、语用特征及句末副词的虚化或者说语气词化倾向等问题，进行比较全面的探讨，指明从副词后置到副词复用的演化具有单方向性，副词复用句具有交互主观功能，该结构正在固化为一个“构式”，句末成分虚化是具有类型学价值的语言现象。同其他几类复用结构相比，副词复用结构可以说是内部结构相对松散的一类结构，对此类结构进行探讨，有助于人们了解语用成分语法化及语用现象逐渐演化为句法现象的过程。另外，参照类似方言现象分析问题，从而预测普通话副词复用结构的演化趋势，也是该文所做的有益的尝试。

第二章《人称代词复用结构再议》，通过考察该结构对人称代词的选择倾向，说明该结构乃至各类复用结构的“交互”语境特征；具体分析其中出现频率和固化程度较高的 “你 + X + 你”结构，特别是通过能否进入该格式的“X”成分的语义和情态特征的对比，证明此类结构已经固化为具有特定的语义内涵的句式框架，即已有一定的构式化倾向。另外，本章对此类复用结构的生成途径也有涉及，从而对在语料检索中该类结构呈现相对高频特点的原因做出一定的说明。

第三章《“我/你+说/想/看+/我/你结构分析》，讨论派生自话语标记“你/我+说/想/看”的“你/我+说/想/看+你/我”结构，说明不同结构序列的语法化、构式化程度及与其基础结构的关系，考察“我说我”的演化情况，具体分析同样具有明显的独立性和固定化特征的“你说你”和“你看你”的功能区别，并主要从语法化规律的角度对其功能区别形成的根源加以阐释。

第四章《“X 什么 X”构式的语义内涵及语用功能》，对“X 什么 X”结构的形式、语义及功能特点进行比较详尽、深入的描述与分析，提出该结构已经构式化，可被看做一个“(引用性)否定构式”。在该文所讨论的几类复用结构中，“X 什么 X”是构式化程度最高的结构，

复用结构的固定化、主观化特征在此类结构中体现得最为突出、充分。为此，该文将“X 什么 X”结构看作复用结构的“指标性格式”，对其结构形式、语义内涵及语用功能做出比较全面、明确的阐释。

总之，对该文所研究的问题，先行研究还只限于“个案”研究，并未将其作为一类语法现象统一命名及研究，也还没有成系统的研究成果面世。在此意义上说，该文所做的研究具有一定的开创性和挑战性；该文所研究的复用结构是汉语口语现象，对具有交互性、即时性特点的口语语段进行分析，应为语料工作的主要内容。应当说，这样的语料工作是颇具难度的。作者除了使用汉语口语语料库之外，也考察了现代电视剧及访谈录音资料中的用例，不仅搜集到较为丰富、典型的语料，而且对语料库的转写错误做出订正，这是比较可取的做法。该文结构完整、合理，对先行研究的把握比较全面、准确，语料的使用及相关理论学说（如构式语法理论、主观化和语法化理论、方言类型学理论）的运用大体恰切，内容有新意，也有一定的学术价值。从答辩中可以看出，作者对汉语语言事实的了解比较充分，专业基础比较扎实，审查委员对其回答问题的情况基本满意，并看好其专业发展前景。

当然，该论文也还存在一些不足之处，现简单列举如下：首先，该文所研究的几类结构实际上处于从语用现象演化为句法现象的不同阶段，其语法化或者说构式化程度是有所不同的，该文虽然对此已经有所述及，可是未做更为深入的考察，未能据此形成对其演化轨迹的整体性、规律性认识；对某些概念的界定及阐释不够清晰，如“句”、“结构”与“构式”及“主观性”与“交互主观性”等；对自造句的母语者验证情况及转引文献的核查情况，缺少必要的说明；包括“复用”结构在内的重复现象是汉语中很重要也很有特点的一类语言现象，同类或相关现象在汉语的历时发展及方言中有着更为丰富的表现，希望作者能够进一步从历史语言学及方言类型学的角度对其深层理据加以说明；该文所讨论的“复用”结构是汉语口语现象，为求准确，建议在论文题目中加上“口语”二字。另外，论文各部分质量略有差异，相对而言，第一章和第四章内容比较充实、成熟，观点明确，论证充分，中间两章内容还不够充实，对某些问题的分析缺乏说服力。

鉴于论文及答辩的总体情况，并考虑作者的综合研究状况，审查委员同意该论文通过审查，并建议授予作者博士学位。

博士論文審査の要旨（日本語訳）

本論文で論じられている「複用」構造は、現代中国語の口語において比較的多く見られる独特な文法現象である。中国語学界では、これまでこの現象に属するいくつかの構造については既に言及されていたが、しかし全面的かつ体系的な研究はなされておらず、またこの文法現象の意味機能や発生メカニズムなどについては、具体的で踏み込んだ解釈がなされてこなかった。本論文はいくつかの先行研究を基礎としつつも、品詞の枠を超えた形で広く「複用」の現象を取り上げ、その描写と解釈を行っている。こうしたテーマの設定及び研究の角度と方法は、高く評価すべきものと言える。

「前言」と「結語」の部分を除けば、本論文は四章に分かれ、現代中国語の口語において使用頻度の高い四つの複用構造を取り上げている。即ち、(1) 副詞の複用構造、(2) 人称代名詞の複用構造、(3) “我/你＋説/想/看＋我/你”構造、(4)“Ｘ什么Ｘ”構造である。

第一章「副詞の複用構造初探―副詞の“都”、“還”を例として―」は、副詞の複用構造が生起する条件、その語用論的特徴、及び文末に置かれた副詞の虚化ないしは語気助詞化の傾向について、全面的な検討を行ったものである。ここでは、副詞の後置から複用に至る過程が一方向的な変化であること、副詞の複用文が交互主観機能を具えていること、この構造が固定化されて一つの「構文」へと変化する途上にあること等が明らかにされている。文末成分の虚化は、類型論的な検討に値する言語現象である。他の複用構造に比べると、副詞の複用現象はその内部構造が充分に固まっているとは言えないため、この構造を検討することにより、我々は語用論的成分の文法化、ないしは語用論的現象が文法現象へと変化していく過程を見て取ることができる。さらに、類似した変化を起こしている中国語方言の現象を分析することにより、標準語の副詞が複用構造へと変化していく方向性を予測しており、これも本章のなした有益な試みの一つと言える。

第二章「人称代名詞の複用構造再論」は、複用構造が取りうる人称代名詞の選択傾向に対する考察を通じて、この構造ないしは複用構造全般が「交互」の文脈的特徴を持つことを明らかにしている。具体的な分析としては、出現頻度が高くかつ固定化の傾向が強い“你＋Ｘ＋你”の構造を取り上げ、これに代入できる“Ｘ”の意味的、モダリティ的特徴を比較することによって、この構造がすでに固定化し特定の意味を内包する構文としての資格を有していること、つまり構文化の傾向にあることを論証している。その他、本章ではこの複用構造の生成メカニズムについても言及し、この構造がコーパスの中でかなりの高頻度で現れる原因について説明を加えている。

第三章「“我/你＋説/想/看＋我/你”構造の分析」では、談話標識“你/我＋説/想/看”から派生した“你/我＋説/想/看＋你/我”構造を取り上げ、異なる構造タイプにおける文法化と構文化、及びその基礎構造との関係を明らかにした上で、“我説我”の変化過程について考察している。ここでは、同様の構造でありながら明確な独立性と固定化傾向を持つ“你説你”、“你看你”との機能的区別を分析するとともに、文法化規則の角度から、その機能的区別が生まれた原因について解釈を加えている。

第四章「“Ｘ什么Ｘ”構造の意味的内包と語用論的機能」では、“Ｘ什么Ｘ”構造の形式的、機能的特徴について詳細な描写と分析を行い、この構造が既に構文化しており、「（メタ）否定構文」と見なしうることを主張している。本論文の中で取り上げる複用構文の中では、“Ｘ什么Ｘ”は構文化が最も進んでいる構造であり、複用構造の固定化、主観化の特徴はこの構造において最も典型的に現れている。そのため、本章では“Ｘ什么Ｘ”構造を複用構造の「指標的形式」と見なして、この構造の形式的、意味的内包及びその語用論的機能について、全面的かつ明快な解釈を加えている。

総合的に見て、本論文が追求したのは、先行研究ではなお「個別事例」研究の域に留まり、いまだ一つの文法現象として命名し研究されたことはなく、体系的な研究成果も世に問われていない課題である。この点において、本論文が行った研究は開拓的であり挑戦的なものと言える。また、本論文が扱った複用構造は中国語の口語に見られる現象であるため、使用する語料は相互的、即時的な特徴を持つ談話資料でなければならないが、このような語料を分析するのは極めて難度の高い課題である。氏は中国語の口語コーパスを使用する以外にも、現代のテレビドラマやインタビュー録音等を扱い、典型的な用例を豊富に収集とともに、既存のコーパスの誤りを指摘するなど、その方法は手堅いものと言える。論文の構成には整合性があり、先行研究の把握は全面的で、かつ正確である。コーパスの使用及び関連する理論（構文文法論、主観化・文法化理論、方言類型論など）の把握も大体において適切であり、内容的にも創見がある。総じて、一定の学術的価値を有すると評価することができる。口頭試問においても、氏が言語事実を充分に把握しており、専門分野に関する基礎的知識を備えていることが見て取れた。審査委員が提起した問題についても概ね的確に答えており、研究の更なる進展を期待させるものであった。

当然のことながら、本論文にはなお不充分な点がいくつかあり、それらを列挙するならば以下のようになる。１）本論文が取り上げるいくつかの構造は、実際には語用論的現象から文法現象に変化する過程において異なる段階に位置しているため、その文法化あるいは構文化の程度も異なるのだが、本論文ではこのことについて簡単な言及があるものの、

詳細な考察には至っていないため、変化過程の体系性及び規則性を構築するには至っていない。２）「文」、「構造」と「構文」、「主観性」と「交互主観性」など、本論文で使用されるいくつかの概念について、その境界及び定義が明確ではない。３）作例の母語話者による検討、及び引用文献の原典との照合につき、必要とされる説明を欠いている。４）「複用」を含む重複の現象は中国語において重要かつ特徴的な言語現象であり、同類あるいは類似の現象は中国語の通時的変化及び方言において豊富な実例を有するので、歴史言語学及び方言類型論の分野からも理論的な説明を補強すべきである。５）本論文で取り上げる「複用」は中国語の口語に見られる現象であるため、論文のタイトルにも「口語」と明記すべきである。以上の他にも、本論文では各章における内容のレベルに不均衡が見られ、相対的に言って、第一章と第四章は分析・論述ともに高い水準に達しているものの、その間の二つの章には説得力に欠ける部分、論述内容と事実関係が緊密さに欠けている部分が残されている点を指摘することができる。

以上、提出された論文及び口頭試問の全体的状況を考慮するとともに、氏のこれまでの総合的な研究状況を勘案して、審査委員一同は本論文が審査を通過し、博士の学位を与える資格を有するとの意見で一致した。